

◆資料

看護学部学生の国際的活動に関する意識調査

Assessment on the international activities of the nursing students

田村 康子 溝畑 智子 小林 愛 長谷川 有里 宇賀 昭二 菅野 由美子

Yasuko Tamura, Satoko Mizohata, Ai Kobayashi, Yuri Hasegawa, Shoji Uga, Yumiko Kanno

抄 録

本調査の目的は、本学看護学部学生の国際的活動に関する意識や期待、活動の実態を明らかにし、学部における国際的活動の方向性を検討することである。1年生から3年生264名を対象に無記名の自記式質問紙調査を行い回収率は18.9%であった。68%の学生が外国に関心があると回答したが国際交流への関心は54%と若干低かった。国際交流や異文化経験は将来看護職になる上で役立つと考えている学生は90%であり、医療や看護の視点で国際交流や異文化を学ぶことへ前向きであることが明らかになった。国際交流に関心がない理由は、興味が無い、語学が苦手、外国が怖いなどがあげられた。本学の海外研修プログラムへの参加を希望しない学生は58%であり、理由は語学、経済、時間的余裕のなさ、関心のなさであった。一方、海外の病院や看護大学訪問の希望があり、海外の医療や看護に関心があることがわかった。これらから、語学、期間、費用、内容が研修参加に関する要因であり、今後の企画に考慮する必要がある。また、学内で文化の多様性を学ぶ機会を設けること、教育や研究における教員と海外研究者との交流を促進し、学生に還元していくことが重要である。

キーワード：国際的活動、看護学生、意識調査

Key words : international activities, nursing student, assessment

I. はじめに

近年、社会の国際化・グローバル化を反映し、大学における看護学教育においても国際保健や看護に関する教育の重要性が指摘されている。大学などの高等教育機関においてグローバル人材の育成が求められ（平成27年度文部科学白書、2017）、看護学教育においても社会から求められる看護の役割として国際社会や多様な文化における看護職の役割を学ぶことが示されている（文部科学省大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会、2017）。また、本学看護学部の教育目標においても「固有の文化を尊重し、すこやかな社会を創造する人をはぐくむ」ことが掲げられ、対象者の背景となる様々な文化を理解し尊重できることが目標としてあげられている。異なる文化を尊重できることは、日本看護協会（2003）による「看護者の倫理綱領」の条文2に明記され、看護職にとって倫理的な意義を有する。「文化とは人々がどのように生きているかを表したものであり、それを均質にしかも固定的にとらえることはできない（黒

木、2014）」ものであり、多様に異なる文化を持つ人々を理解する教育的な機会が学生に提供されることは重要といえる。本学部における国際交流推進委員会の業務には、学部の国際交流推進に関する活動が含まれており、委員会活動を通してこの教育目標の達成に貢献していくことが求められている。本学部は2015年4月に開設し、現在3期生が入学している。1期生を対象にした2015年の学生意識調査（田村、丸山、溝畑、2016）を踏まえ、これまで看護学部における国際交流推進に関する活動を実施している。3年生までの各学年において看護学部生が学びを積み重ねている中、さらに学生のニーズを反映した活動とは何かを検討したいと考えている。そのため、本学看護学部生の国際的活動に関する意識や期待、活動の実態を明らかにし、看護学部における国際的活動の方向性を検討すること、それらの結果をもとに国際的な学びができる学習環境を整えることを目的に質問紙調査を実施した。

II. 方法

1. 調査方法と対象者

本学看護学部1年生から3年生266名を対象に調査を行った。全員が履修している授業終了後に、欠席者を除

く 264 名に対し、無記名自記式質問紙を配布した。授業担当ではない教員が調査の意図を説明した。記入後の質問紙は、学生自らが教室とは別の場所に設けた回収ボックスに入れることができるようにし、誰が回答したかは分からないようにした。調査時期は 2017 年 4 月であり、配布から回収まで 1 週間の期間を設けた。

2. 調査内容

調査項目について、看護学部の国際交流推進委員により検討を行った。調査内容は、基本的な情報および国際的活動に関するものから構成した。基本的な情報は、年齢、学年、使用可能な言語、国際的活動に関連する経験や資格（英検など）の 4 項目を含む。国際的活動に関するものは、国際的活動への関心の有無とその理由、国際交流の経験や異文化に関する知識が看護職として有用かどうか、渡航経験、外国人の友人の有無、大学以外で学習している言語、大学の海外研修プログラムや国際交流に関する情報提供に関する認知・関心、国際的活動に関わる上での支障、今後参加したい国際的活動、海外での研修に参加する場合の捻出可能な費用、参加可能な期間、国際保健に関する授業の受講への関心、関心を持っている国・地域とその理由、本学の国際的活動に関して大学に期待することの 14 項目から成る。

3. 分析方法

選択式回答質問紙は各変数について記述統計値を算出した。分析には SPSS (version21) を用いた。自由回答式質問紙に関しては回答の意味内容の類似性に基づき分類した。

4. 倫理的配慮

本調査の実施にあたって、調査依頼用紙に目的、方法、倫理的配慮を記載した。倫理的配慮として、調査への協力は自由意思であること、回答しなくても成績評価などには関係せず不利益を被ることはないことを明記した。プライバシーの保護として、質問紙は無記名式とした。質問紙への回答をもって研究参加への同意を得たものとした。データの処理については、年齢や海外渡航歴など個人の特性や経験に関するデータはそれぞれの質問項目における分析のみとし、個人が特定されないよう配慮した。神戸女子大学人間を対象とする研究倫理委員会の承認を得た（承認番号 H28-24）。

III. 結果

1. 対象者の概要

回収した質問紙は 50 部（回収率 18.9%）、学年別では、1 年生 17 名（18.7%）、2 年生 19 名（20.9%）、3 年生 14

名（17.1%）であった。平均年齢は 19.1 歳（SD0.9）であった。国際的活動に関連する経験では、ホームステイ関係が最も多く 7 名（14%）であり、このうち受け入れの経験は 2 名、自分自身がホームステイした経験を持つ者は 5 名であった。研修・留学は 3 名（6%）であった。長期の海外居住経験を持つ帰国子女は 1 名（2%）であった。その他、通学していた高校が留学生を数日間受け入れ交流を持った学生がいた。

2. 国際的活動に関して

1) 渡航の経験と関心を持つ地域

外国へ渡航した経験を持つ者は 23 名（46%）であった。渡航先はアメリカが最も多く次いでオーストラリア、韓国があげられていた。主な目的は修学旅行や家族旅行であったが、親の仕事の関係での長期滞在、短期留学やホームステイ、研修プログラムへの参加もみられた。関心のある地域について、ヨーロッパ地域と回答した学生は 21 名と最も多く、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、北欧諸国などがあげられていた。次いで 18 名がアメリカやカナダなどの北米地域をあげた。アジアやオセアニアにも関心が示された。関心を示した学生数は多くないものの、アフリカ地域、南アメリカ、中東地域もあがっていた。行きたい理由としては、観光地への訪問、現地の食べ物への好奇心、現地の医療や看護への関心、語学への関心、治安の良さや渡航費用の安さなど多岐にわたっていた。渡航経験および希望とも欧米地域次いでアジア・オセアニア地域への関心が高いが、少数ながらアフリカ、南アメリカ、中東にも目を向けている学生もいることが分かった（表 1）。

2) 言語能力

使用可能な言語は、英語が 6 名（12%）、中国語が 1 名（2%）であった。国際交流に関連する資格では、9 名（18%）が英検や TOEIC など語学に関する資格を有し、そのうち 1 名が準 2 級、1 名が 2 級を取得していた。大学以外で学んでいる言語があると回答した者は 2 名（4%）であり、言語は英語と中国語が 1 名ずつであった。「ない」と回答した者は 45 名（90%）であり、ほとんどの学生が学外で外国語習得に関する活動はしていなかった。

3) 国際的活動への関心

外国への関心について、関心があると回答した学生は 34 名（68%）、関心がないと回答した学生は 16 名（32%）であった。国際交流について、関心があると回答した学生は 27 名（54%）であり、外国への関心を持つ割合よ

表1 関心のある国・地域とその理由 (() は人数 複数回答あり)

地域	国・地域	行きたい理由	地域	国・地域	行きたい理由
ヨーロッパ (21)	スイス	医療の制度もしっかりして いてどちらかというと福祉 っぽくて落ち着いた看護だ と聞いたから	北米 (18)	カナダ	英語の発音がきれいな。語学 留学してみたい。
	イタリア・フランス ノルウェー・フィン ランド	ご飯、歴史		カナダ	英語の語学留学で最適と考 えるから
	イギリス・北欧	イギリス：ナイチンゲール の地で看護の発祥地だから。 北欧：社会福祉制度がすば らしいから		ニューヨーク	世界の情報が集まっている ところだから
	フランス・パリ	エッフェル塔を実際に見た い		—	土地が広く都市部と田舎の 生活環境の差が大きくあり そうだから
	—	福祉が充実しているから		—	医療先進国だから現場を見 たい
	—	ヨーロッパは医療が進んで いると聞いたから（保険な ど）		—	世界の中心的な国だから
アジア (16)	中国・台湾	中国語の力をつけたいから	南米 (4)	—	医療先進国だから現場を見 てみたい
	韓国	美味しいもの、可愛い物が たくさん		—	—
	台湾	夜市に行きたい	オセアニア (15)	オーストラリア ニュージーランド	オーストラリアでは国際看 護師の資格を取ることが可 能だから。ニュージーラン ドは自然が広がっている ところ旅行したいから
	韓国・台湾	安い値段で気軽に行ける から		オーストラリア シンガポール	おしゃれなイメージがある から。美人が多そう。
	台湾	綺麗な場所が多い。日本語 がぎりぎり通じる。		オーストラリア	ワラビーがいるから
	中国	人口が多く公害も多いから		オーストラリア	1度行ってみて日本と似て いたから
	ベトナム	父が仕事の関係で何度も 行っているため		—	アメリカやイギリスが現地 の大学の卒業資格があるの に対し、オーストラリアは その必要がないとネットで 聞いたから
	—	発展途上国が多いと思う から		—	—
アフリカ (9)	—	野生動物をみたい	中東 (3)	—	—
	—	医療が整っていない地域と してボランティア活動に興 味があるから		—	—
	—	医療の現状を知りたい		—	—

り若干低かった。外国人の友人の有無に関する設問では、いと回答した者は14名(28%)であり、ほとんどの者はいなかった。しかし、いないと回答した34名のうち、24名(71%)が今後外国人の友人を作りたいと考えていた。外国に関心を持ち、外国人の友人を持ちたいという思いを持つ一方で、国際交流に対してはそれほど強く思っていない状況がみられた。国際交流に関心がないと回答した23名(46%)の学生が記載した理由(自由記述)には、英語が苦手、言葉が通じないので外国が怖いなどコミュニケーションに関する理由が8名、興味が

ない、日本が好きなど国際的活動や外国に関心がない者が4名であり、コミュニケーションに困難を感じていることや国際的な活動そのものへの関心の無さがあげられていた(表2)。

国際交流に関心を持つ学生が興味をもつ国際交流活動では(自由記述)、ボランティア活動に関するものが7名、国際保健や災害医療など海外の医療や看護に関するものが4名、語学や文化を学ぶものが4名、ホームステイが3名、交換留学が2名であった(表3)。また、回答者全員に対して今後参加してみたい国際活動(選択肢)に関

表2 国際活動に関心がない理由 (n=23)

項目	人数
英語が苦手	7
言葉が通じないので外国が怖い	1
興味がない	2
日本が好き	1
交流したいと思わない	1
無回答	11

する設問では、23名の学生が外国の病院見学をあげ最も多かった。次いで語学留学が21名、外国の看護系大学の訪問が17名、国内でのボランティア活動が17名、ホームステイが16名、国外でのボランティア活動が12名、国内における異文化交流が10名であった。学年別でみると上位3つにあげられる活動順位に違いが見られた。最も多くあげられた活動は、1年生では語学留学、2年生と3年生では外国の病院見学であり、2年生以上では医療や看護の場を知る活動が多かった。外国の病院見学や看護系大学に関して具体的に知りたい内容では、日本との施設や構造の違い、医療システムの違い、看護ケアの実際、学習方法や実習方法の違いなどがあげられた。一方、国際保健医療の学習会や学会、学生間交流、講演会に関しては参加したいと回答する学生は少なかった(表4)。

表3 国際交流に関心のある学生が関心を持つ国際活動 (n=27 複数回答)

項目	人数
ボランティア	7
語学・文化を学ぶ	4
ホームステイ	3
交換留学	2
海外の医療・看護、国際保健、ユニセフの活動	4
交流イベント	1
世界を知りたい	1
無回答	9

2) 国際交流経験や異文化経験の有用性や国際保健への関心

自分が看護職として働くうえで国際交流経験や異文化経験が「とても役に立つ」と回答した学生は24名(48%)、「少し役立つ」と回答した学生は21名(42%)であり、あわせて9割の学生が役立つと考えていた。理由(自由記述)として、自分がケア提供者として外国人に関わることがあると思う者が21名と最も多く、次いで異文化理解は視野が広がるなど意義があると思う者が7名、外国に行きたい・海外で看護職として働きたい者が3名であった。一方、「あまり役に立たない」と回答した学生は5名(10%)であった。その理由として、「日本で働き日本人を対象に関わると思う」と回答した者が2名、

表4 今後参加してみたい国際活動 (n=50 複数回答)

全体			1年生			2年生			3年生		
順位	項目	人数	順位	項目	人数	順位	項目	人数	順位	項目	人数
1	外国の病院見学	23	1	語学留学	9	1	外国の病院見学	7	1	外国の病院見学	9
2	語学留学	21	1	ボランティア活動(国内)	9	2	外国の看護系大学の訪問	6	2	外国の看護系大学の訪問	6
3	外国の看護系大学の訪問	17	2	外国の病院見学	7	2	語学留学	6	2	語学留学	6
3	ボランティア活動(国内)	17	2	ホームステイ	7	3	ホームステイ	5	3	ホームステイ	4
4	ホームステイ	16	3	外国の看護系大学の訪問	5	3	ボランティア活動(国外)	5	3	ボランティア活動(国内)	4
5	ボランティア活動(国外)	12	3	国内における異文化交流	5	4	ボランティア活動(国内)	4	4	ボランティア活動(国外)	3
6	国内における異文化交流	10	4	ボランティア活動(国外)	4	4	外国の看護や保健に関する講演会	4	5	国内における異文化交流	2
7	国際保健医療関係の学習会	5	4	国際保健医療関係の学習会	4	5	国内における異文化交流	3	6	国際保健関係の学会	1
8	外国の看護や保健に関する講演会	7	5	外国の看護や保健に関する講演会	3	6	国際保健に関心のある学生交流	2	-	国際保健医療関係の学習会	0
9	国際保健に関心のある学生交流	3	6	国際保健に関心のある学生交流	1	-	国際保健医療関係の学習会	1	-	国際保健に関心のある学生交流	0
10	国際保健関係の学会	2	6	国際保健関係の学会	1	-	国際保健関係の学会	0	-	外国の看護や保健に関する講演会	0

「使う気がしない」が1名、「思いつかない」が1名であった(表5)。

渡航経験の有無が国際交流経験や異文化経験が看護職となる自分に役立つと思うことには有意な差はなく、直接外国に行った経験との関係はみられなかった。学年による違いと役立つと思う学生数の関係も統計的な差がみ

られなかった。役立つと回答した学生の中で、その理由としてケア提供者として外国人に関わると思うと考えて答えた回答数の割合を学年ごとでみると、1年生7名(44%)、2年生8名(57%)、3年生4名(29%)であり、1年生においても役立つと回答した中の半数近くを占めていた。

表5 看護師として働く上で国際交流の経験や異文化に関する知識が役立つと思う理由と役立つたないと思う理由
(記載内容に複数の意味がある場合はその内容の類似性により分類した)

役立つと思う理由 (n=45)	自由記載回答内容
自分がケア提供者として外国人と関わると思う (21)	日本で働いていても海外の患者さんもいると思うから (1年)
	国によって文化も違い、マナーも違うから人への対応も知っていることと合わせることができる (1年)
	外国人の患者さんに関わることがあるかもしれないから (1年)
	外国人の方が病院に入ってくる可能性もある (1年)
	外国の人が増えているから (1年)
	外国人の患者も増えてきているから (1年)
	外国人で居住している人や旅行客が増えているから (1年)
	外国人の方とのコミュニケーションがとれるから (1年)
	グローバル化してきた中で日本にも外国人が多く来てくれている。他国を知っておかないとタブーなど犯してしまうことがあると思ったから (2年)
	外国人の患者が来たときに文化などを知りたいから役立つと思うから (2年)
	これからさらに外国人が多くなると思うから (2年)
	外国の患者も来るから。話題のひとつになるから (2年)
	ケアをする対象が日本人とは限らないから (2年)
	海外から日本で移住してきた方に看護を行う機会が増えてくると思うから (2年)
	外国人が病院に来たさいにコミュニケーションをとりやすいから (2年)
日本に住んでいる外国の人たちも病棟に来ることがあるから (2年)	
日本ですんでいる外国人や日本に来ている外国人が増えているから (3年)	
現在、多くの外国の方が日本にいますので、そのうえでその方の国の文化を知ることはケア提供においても大切 (3年)	
日本に外国人が増えたから (3年)	
自分が他の国で活動することがあるかもしれないから。日本に住んでいる外国人の方が病院に来られることがあると思うため (3年)	
海外の人も日本に来て病気が発症したりすることもあるから。関わる機会がないとはいえないから (3年)	
視野が広がるなどの意義がある (7)	看護ボランティアとしてアジアやアフリカなどの国で働くことができるという視野を広げることができるから (1年)
	異文化を知ることで固定概念を取り払うことができると思うから (1年)
	外国での看護の違いなどをみつけれると思ったので (2年)
	個別性をより感じられると思うから (2年)
	日本と違うところに気づいたり、様々な価値観を知ることができる (3年)
世の中いろんな考えや文化があるため、それを理解する必要もでてくると思うため (3年)	
国ごとに看護には違いがあって、良いところは日本に活かせると思う (3年)	
外国に行きたい・海外で働きたい (3)	英語が話せることは将来役に立つと思うから (1年)
	将来国境なき医師団に参加したいと思っているから (1年)
	外国に行きたいから (2年)
無記入 (15)	
役立つたないと思う理由 (n=5)	
日本で働き日本人を対象に関わると思う (2)	日本で働くから (1年生) 日本で働き、日本人をお世話すると思うから (2年)
使う気がしない (1)	使う気がしないから (2年)
思いつかない (1)	最新技術を知れることくらいしか思いつかないから (2年)
無記入 (1)	

国際保健に関する授業への関心について、多いに関心があると回答した学生は10名(20%)、少し関心があると回答した学生は25名(50%)と7割の学生が関心を持っていた。一方、あまり関心がない2名(4%)、まったく関心がない3名(6%)と1割の学生は関心を持っていなかった。

3) 学内で実施されている海外研修プログラムへの関心

学内の海外研修に関する説明会を知っているかどうかについて、36名(72%)の学生が知っていると回答した。この36名のうち、参加したことがある者は1名(2%)、参加したことがない学生は35名(97%)とほとんどいなかった。知らないと回答した者は11名(22%)であり、ほとんどの学生は学内で説明会があることを知っていた。

学内の海外研修プログラムの参加を希望する学生は16名(32%)、参加を希望しない学生は29名(58%)であった。参加希望理由には、異文化や海外への興味・海外の看護への興味を示す者が5名、次いで国際的な共通言語である英語を習得したいこと、国際看護師を目指すうえで経験を積みたいこと、学生のうちしかできないことをやりたいことなどがあげられた。参加を希望しない理由では、忙しく時間がないと回答した学生が8名と最も多かった。2名が「単位がとれないから」と看護学部での学習との兼ね合いや、1名が「学校を休まないといけなから」と既存の学内海外研修プログラムのスケジュールに関連した意見があった。次いで、「興味がない・考えたことがない」、「経済的な理由」、「英語が苦手」、「日本人と一緒にいっても意味がない」などの意見があった。関心を持つプログラムとして挙げたものは、ハワイ大学英語研修(アメリカ)3名、ピッツァー大学サマープログラム(アメリカ)2名、ケント大学英語研修(イギリス)2名、高麗大学韓国語研修(韓国)1名、その他研修名は特定していないが語学に関する研修や医療研修への希望があった(表6)。学年別では、参加を希望する割合は1年生が41%と最も高く、希望しない割合は3年生が最も高く(64%)、学年があがるにつれ希望しない者が増える傾向がみられた。参加への希望の有無と外国や国際交流への関心の有無との関連をみると、参加希望者16名中、外国への関心がある者は15名(93.7%)、国際交流への関心がある者は13名(81.2%)であったのに対し、参加を希望しない29名では、それぞれ16名(55.2%)、11名(37.9%)と有意に低かった($p<0.01$)。

4) 学部内での国際交流活動への関心

看護学部において、平成27年より年に2回実施している国際ランチタイム報告会について、知っているという回答した者は24名(48%)、知らないという回答した者は10名(20%)だった。国際ランチタイム報告会を知っている24名のうち、参加したことがある者は16名(67%)、参加したことがない学生は8名(34%)であった。学年別では、国際ランチタイム報告会を知っている者は1年生0名、2年生では12名(63%)、3年生は12名(86%)と学年があがるにつれ、その割合が増加していた。参加したことがない理由として、「食事はゆっくりしたい」「昼食は友達と楽しく食べたい」などの意見があった。国際ランチタイム報告会に関する意見などの自由記載では、海外のことを知ることができ良かった・おもしろかったという意見が4名、同じくらいの年の人が沢山のことに興味を持ち話す姿が格好良いとの意見が1名であり、異文化について知る機会を肯定的に捉え学生自身が発表することへの関心を示す意見があった。一方で、ただまとめや感想を話すだけでは誰も聞かない、その場にいる学生同士の話し声大きい、イスがなくて座れなかったといった環境や設営に関する意見がそれぞれ1名ずつあった。

国際交流活動情報に関する掲示板を見る頻度について、「あまり見ない」は26名(52%)、「見ない」は13名(26%)と回答した学生が約8割を占め、多くの学生が見ていないことが分かった。掲示板を見ない理由として、2名が「あることを知らなかった」、1名が「よく使用する教室とは異なる階に掲示板があるため見に行かない」と答えた。また、「学生では出来ない活動に関する内容の掲示が多いと感じる」、「自分では収集できない情報があるがたい」など掲示している情報の内容に関する意見がそれぞれ1名ずつあった。

5) 国際的活動に関わる際の支障

国際的活動に関わる際の支障について「ある」と回答した者は25名(50%)であった。その理由としては、語学に関するものが17名と最も多く、次いで経済的理由7名、家族の心配2名、時間がない2名、学力が不足していることの自覚2名であった。

これらの理由を学内の海外研修プログラムへの参加への希望の有無で比較すると、語学や経済面についてはどちらの群も共通して上位に位置しているが、参加を希望しない学生は時間がないことや学力に関する理由が含まれている点に違いがあった(表6)。参加を希望してい

表6 学内の海外研修プログラムの参加希望と国際活動への支障理由

(記載内容に複数の意味がある場合はその内容の類似性により分類した)

参加を希望する人 n=16			参加を希望しない人 n=29		
		人数			人数
その理由	異文化や海外への興味	4	その理由	忙しい	8
	海外の看護への興味	1		興味がない	4
	英語を習得したい	1		経済的に余裕がない	3
	学生のうちでしかできないことをしたい	1		単位が取れない	2
	国際看護師を目指すうえで経験を積みたい	1		英語が苦手	1
	無記入	4		学校を休まないといけない	1
			日本人と一緒にいっても意味がない	1	
			無記入	19	
		人数			人数
関心を持つプログラム	ハワイ大学英語研修 (アメリカ)	3	その理由	忙しい	8
	ピッツァー大学サマープログラム (アメリカ)	2		興味がない	4
	ケント大学英語研修 (イギリス)	2		経済的に余裕がない	3
	高麗大学韓国語研修 (韓国)	1		単位が取れない	2
	語学研修・英語研修	2		英語が苦手	1
	医療研修	1		学校を休まないといけない	1
			日本人と一緒にいっても意味がない	1	
			無記入	19	
		人数			人数
国際的活動への支障理由	語学	6	国際的活動への支障理由	語学	11
	経済面	4		経済面	3
	家族の心配	1		時間	2
	生活	1		学力不足	2
	場所	1		家族の心配	1

ない29名中、外国または国際交流に関心を持つ学生は19名存在した。この19名の学生達にとっては、言語能力、経済状況、時間の無さが、関心を持っているにも関わらず学内の海外研修プログラムへの参加を希望しない要因となっていた。

学生たちにとって、海外研修参加に捻出可能な費用では、21名(40%)が10～19万円、次いで18名(34%)が9万円以下と回答した。約8割の学生において19万円以下が捻出可能な範囲だった(図1)。他には、4名(8%)が20～29万円、1名(2%)が30～39万円と回答した。研修参加に可能な期間として最も多かったのは、1～2週間で15名(27%)であり、次いで2～3週間以内が14名(26%)、1週間以内が12名(22%)であった。4名(7%)が3～4週間、2名(4%)が1ヶ月以上でも参加可能と回答した(図2)。

6) 国際的な活動や授業に関する大学への期待

本学での国際的な活動や授業への期待では、「英語が話せるようになること」、「経験豊富な先生方の話をたくさん聞きたい」、「留学生との交流」など、語学能力の獲得や国際経験を持つ教員や留学生とのコミュニケーション

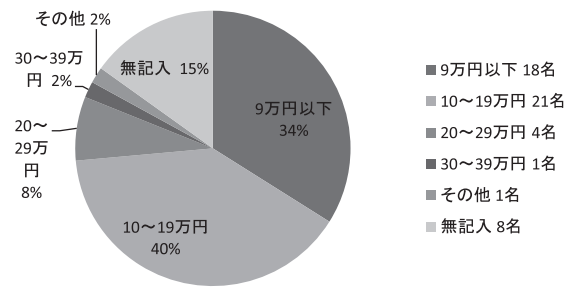


図1 海外研修参加に捻出可能な費用 n=53 (一部複数回答)

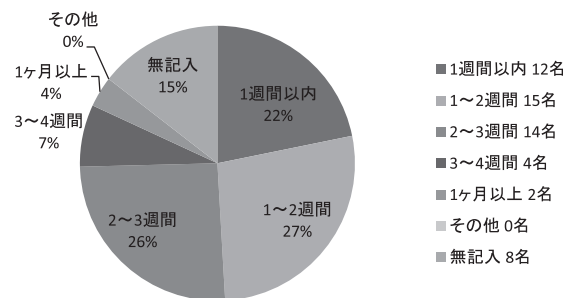


図2 海外研修参加に参加可能な期間 n=55 (一部複数回答)

ンについて意見があった。また、「看護学部での研修」や「看護学科での国際的な活動」、「看護学部が語学研修や留学で単位を取得できること」と、看護学部の特徴を生かした企画や活動、単位を取得への期待が聞かれた。

IV. 考察

1. 看護学部学生が抱く国際的な活動への関心

今回の調査では50名中、約7割を占める34名が外国への関心があると回答した。しかし、回収率は18.9%と低いことから、学生全体としては調査への関心は高くなく、今回の回答には外国や国際的活動に関心を持つ学生が積極的に調査に協力したことが考えられる。国際交流への関心があると回答した学生は、27名(54%)と外国に関心を持つと回答した者よりも低く、外国に関心を持つことが国際交流への関心を同じように持っているとは限らないことが考えられた。看護学部全学生数からみると、国際交流に関心があると回答した27名の割合は10%となり、全体的には約1割の学生が国際的活動に関心を持つと推測される。2015年に本学の1年生を対象に実施した意識調査(田村ら、2016)では、国際的活動に関心を持つ割合は69%であり、今回の調査では減少している。他大学の看護学部学生の国際活動に関する意識調査では、国際交流や海外の看護事情に関心があると答えた学生(対象者数124名、回収率35.6%)は70.2%との報告がある(西頭、月野木、カルデナス、小林、小林、2014)。また、濱畑ら(2004)の1年生から4年生までの看護学生を対象とした同様の調査(対象者数330名、回収率95.7%)では約5割の学生が、将来看護職として保健・看護活動やボランティア活動を通じた国際交流を希望していると回答している。本学での国際的活動に関心を持つ学生について、前回の調査結果では他大学の報告と同じ傾向が見られていたが、今回の調査では低い傾向にあることが示唆された。国際交流に関心がない理由には、興味がないという理由のほかに英語が苦手であることなどの語学に関することや、語学ができないことから外国が怖いという不安が述べられていた。小島ら(2015)は、国際交流に内向きである学生は、外向きである学生に比較して海外での生活や留学生と関わることへの不安が高く、交流することに不安が影響することを述べている。今回の回答にも、外国に行くことを怖いという気持ちを持っていることが記載されており、語学への自信の無さに加え、不安や恐怖感が国際的活動への消極的な姿勢にも関連していることが示唆された。

しかし、学生達の国際交流への関心は低い傾向がみら

れる一方で、自分が将来看護職として働く上で国際交流経験や異文化経験を持つことが役に立つと感じている学生は9割を占めていた。このように感じる理由の多くは、ケア提供者として外国人患者と接することがあるというものであり、1年生から3年生まで各学年において述べられていた。調査を実施した時期は4月であり、1年生は病院実習をまだ体験していない時期だったが、既にケア提供者として外国人に関わることを意識していることが分かった。平成28年末の在留外国人数は238万人(前年度比+6.7%)に達し増加の一途にある(法務省、2017)。神戸市においても外国人数は約4万6千人が居住し、その中でも大学の所在地である中央区は約1万2千人と最も多い(神戸市、2017)。学生は直接的な交流の機会は持たなくても、通学やアルバイトなど日常生活の中で外国人を目にする機会が多いことの影響も考えられる。役に立つと考える理由の中には、「他国のことを知っておかないとタブーを犯してしまうかもしれない」「文化を知ることがケア提供において大切」と、外国人に接するという行為だけではなく、看護ケア提供における文化的配慮の重要性について考える学生もいた。異なる文化的背景を持つケア対象者に対しても、文化に関する基礎知識を持ち、尊重できることは日本看護協会(2003)やICN(2012)の看護倫理綱領にも明示され、看護職として必要な能力のひとつである。実際に学生が臨地実習で外国人患者を受け持つ機会はこれまでもあり、看護基礎教育において文化の多様性や特徴を知り、文化的感受性を培う教育的機会をつくることは重要である。4年次の開講科目である国際保健の受講に7割の学生が関心を示していた。学生がどのようなことに関心を持っているのかや、なぜ関心があるのかの理由は今回の質問項目にはなく不明だが、国際交流への関心よりも高い割合であり、看護職であることや保健医療での視点においては、国際的な視点で学習することへ前向きに考えていることが示唆された。様々な文化を尊重できる看護職の育成は看護学部の教育目標にも掲げられており、学部での授業や国際交流推進委員会による企画を通して学びの機会を充実させていくことが重要である。

2. 学内における国際的活動の利用

本学では、全学部の学生を対象にした海外研修プログラムや一部の学部において交換留学制度があり、学内で説明会を年に2回開催している。看護学部では、教員や学生が、海外の文化や保健医療事情について渡航の経験を基に昼食時間を活用して紹介する国際ランチタイム報

告会、外国人の方を招いて海外や日本の文化をテーマに交流する異文化交流 (Cultural Exchange) (年1～2回) や JICA ボランティアとの交流セミナー (年1回) を開催している。これらの情報や国際交流関連情報は看護学部にある掲示板にスペースを確保し常時掲示している。

海外研修プログラムについて、72%の学生が知っていると回答し、2015年の調査(田村ら、2016)での17%よりも増加した。前回調査後に看護学部があるキャンパスでの説明会の回数が増えたこともあり、学年を経る中で情報に触れる機会が増えたのではないかと考えられる。しかし、実際に参加した学生は1名のみだった。海外研修プログラムに参加を希望しない学生が58%と過半数であること、この中で外国や国際交流に関心を持たない学生が多いことから、関心の無さが説明会参加につながらない一つの要因と推測された。しかし、海外研修参加を希望しない学生の中で、外国や国際交流に関心を持っている学生を合わせると66%を占めることから、別の要因も考えられる。参加を希望しない理由では、学習に追われ時間がないことや看護学部での学習と既存のプログラムのスケジュールとの兼ね合いが難しいことや経済的な要因があがっていた。学習に追われ時間的余裕を感じることができないことや経済的な余裕の無さが、海外研修プログラムについて情報を得るための行動につながっていかない可能性がある。海外研修の期間は、実習と重複する時期のある学年もあるが全てではないので、参加が不可能なスケジュールというわけではない。学生は時間や経済的な余裕の無さから、海外研修への参加を「行けないもの」と最初からあきらめ、情報を得ていないことも考えられる。このような中、2016年度と2017年度に本学の海外研修プログラムへ看護学部の学生が一人ずつ参加した。実際に参加した同級生や先輩の存在を知ることを通して、学生達は既存の海外研修プログラムをより身近に感じ、「行くことができるもの」と捉えることができる一歩になるのではないだろうか。

国際ランチタイム報告会について、1年生では知っている学生はいなかったことには、入学後間もない4月に調査を実施したことが影響していると考えられる。2年生では63%、3年生は86%と学年があがるにつれ、知っている者が増加し、そのうち67%が参加していた。開催場所は、他学部の学生も含め、学生達が普段から昼食をとるコモンスペースで実施していることもあり、参加したことがある学生の割合が高くなっていることも考えられる。学生からは面白い、良かったという意見があり、

学内にいながらにして気軽に海外のことを知る良い機会になっていると思われる。また、海外研修に参加した学生の発表について、「同じくらいの年の人が沢山のことに興味を持ち、話す姿がかっこいい」との意見もあり、聴講する学生にとっては自分たちに身近なモデルとして良い刺激になっていると考えられた。前述したように、看護学部の学生は時間的余裕の無さなどの理由から海外研修プログラムへの参加を最初からあきらめている様子が伺えるが、ランチタイム報告会を通して同じ立場にある学生の体験を聞くことにより、参加について違った捉え方ができる機会となる可能性がある。不参加の理由に昼食を食べながら聴くことに関する意見があった。しかし、国際交流への関心が全体的に低いことを考えると、開催場所を別の教室にするとわざわざ足を運んで参加する学生は限られると思われる。また、昼食以外の時間では授業の関係もあり時間が確保できない。そのため、現在実施している開催方法を継続していくことにより、関心の有無に関わらず広く学生に海外の文化について情報に触れる機会を提供できると考える。話し声が大きいなどの環境的な課題について、聴講への協力を呼びかける掲示をしているが、その効果や他の方法について今後検討していく必要がある。国際ランチタイム報告会は開催する側にとっても無理なく実施できる活動であり、今後も継続する意義があると考えられる。国際活動に関する掲示板については、8割の学生が見ていなかった。存在を知らない学生もあり、オリエンテーションなどの機会を活用して掲示板について伝えていくことや情報提供のあり方についても検討が必要だと思われる。

3. 国際的活動に関わる際の支障

語学が苦手であることは、国際的活動に関わる際の支障の理由としても最も多くあげられていた。また、本学の海外研修プログラムに参加したくないと回答した学生29名(58%)があげた理由では、時間がないことが6名と最も多かった。小島ら(2015)は、大学生が国際交流する際の問題として、「自身の外国語力が不足しており、時間がなく、留学生や留学生との交流に関する情報が不足していること」を報告している。本学の看護学生においても同様の傾向が見られ、看護学部では演習や実習なども多いことから、全学部の学生を対象とした研修プログラムへ参加する時間的な余裕を感じることができないことが示唆された。また、小島ら(2015)は、国際交流に内向きである学生は、外向きである学生に比較して海外での生活や留学生と関わることへの不安が高く、交流

することに不安が影響することを述べている。今回の回答にも、言葉が通じないので外国が怖いという気持ちを持っていることが記載されており、不安や恐怖感が国際的活動への消極的な姿勢にも関連していることが示唆された。このような学生たちに国際的活動へ関心を持ってもらうためには、学内や日本国内で体験できる活動にも目を向け、必要時教員などが通訳を努めるなど語学面でのサポートを整え、心理的負担を少なくし、気軽に参加できる形での企画を検討することが必要である。これまでに、フィリピンからの研修生へのサポートボランティアをグループで実施したり、ネパールから来日した研究者と文化を話題に交流する企画を行った。サポートボランティアを希望する学生は6名を数え、学生からも面白かったと好評であった。他学部の留学生や海外から訪問する研究者との交流などは不定期ではあるが、企画も容易であり、学生にとっては教員からのサポートも受けながら外国人と直接コミュニケーションをとる良い機会となる。外国人との異文化交流については、今後、在日外国人も講師として予定しており、交流する機会を増やしたいと考える。

本学に既にある海外研修プログラムへの参加を希望しない学生のうち、外国に関心がある者は16名(55%)、国際交流に関心がある者は11名(38%)を占めていた。外国や国際交流に関心を持ちながらも、学内の研修プログラムへの参加を希望しない学生が存在していることが明らかになった。このような学生たちが参加を希望しない理由においても、語学力の不足が最も多く、次いで時間や経済面での余裕がないことがあげられていた。海外研修プログラムでは研修参加前に語学に関する演習などサポート体制があるが、学内説明会に参加する学生がほとんどいないため、このような情報も得ていないと考えられる。国際ランチタイム報告会での研修参加者からの情報発信を継続することや学内での説明会に関する周知方法を検討することを通して、十分な情報を得た中で学生達が選択できるようにすることが必要である。海外での研修として捻出可能と考える期間について、1~2週間と回答する者が最も多かった。学内のプログラムでは3週間~1ヶ月にわたるものが多く、学生が渡航可能と考える期間よりも長い。海外研修プログラムに参加したくない理由について、「夏休みも忙しそう」「単位がとれない」という意見があり、研修期間が長くなることにより夏季休暇や春季休暇で予定している学習との兼ね合いが難しい状況も考えられた。捻出可能な費用については、

8割の学生が19万円以下と回答した。本学の研修プログラムの費用は学生たちが捻出可能と考える費用を上回っている。これらから、看護学部生の海外研修への潜在的ニーズは存在するのではないかと考える。研修条件が1週間前後の期間で費用が19万円以下であれば、看護学部の学生にとっても参加しやすく、海外研修参加への敷居を低くすることができる可能性がある。語学面でのサポート体制を整え、研修期間と費用を工夫することが研修企画時に考慮する点といえる。

4. 看護学部における国際交流活動の方向性

高等教育機関におけるグローバル人材の育成の必要性(平成27年度文部科学白書)が高まり、看護学教育においても国際社会や多様な文化を学ぶことが示され(看護学教育モデル・コア・カリキュラム, 2017)、大学における国際交流活動は社会に対する大学の姿勢を示す一つの指標となる。看護学部国際交流推進委員会による活動においては、学生たちが国内外を問わずグローバルな視野を持つことにつながる企画を行う役割があると考えられる。これまでに看護学部において企画した活動は、国際ランチタイム報告会、青年海外協力隊経験者によるセミナー、外国からの研究者訪問時の特別講義や異文化交流など学内で行える活動を中心としており、学部独自の海外研修プログラムはない。全学的な海外研修プログラムは複数存在し、看護学部からも2名の学生が参加している。今回の調査結果から、学生達は外国や異なる文化への関心や海外の医療や看護への関心を有していること、しかし海外研修プログラムへの参加への敷居は高いこと、参加を困難にさせている要因は語学・時間・費用・内容であることが明らかになった。これらから、日々の学生生活において学内で海外の文化を知る機会や外国人と接する機会を持つ企画は学生にとって利用しやすく、現在行っている活動を適宜見直しながら継続していくことに意義があると考えられる。また、海外の研究者との交流については、教員が教育や研究を通して海外研究者とのネットワークを構築することも重要である。学生は教員を介して海外の状況を知り、かつ研究者との交流も持つ機会となり、教員学生双方にとって有用である。文部科学省の国際交流政策懇談会の最終報告書においても、教員自身が様々な機会を通して国際的な経験を重ねることが学生の視点を世界に向ける上で役割を担っていること、このことから教員が世界各国において海外経験を積み重ねることの重要性を述べている。現在、作成中の看護学部ホームページ英語版は、学部紹介だけではなく教

員の研究分野についても世界に向けた情報発信のツールとなると考える。今後、教員の国際的な活動への支援についてどのようなニーズがあり、具体的に何ができるのかについての検討も必要と思われる。

看護学部では海外研修は現時点において実施していない。日本における私立看護系大学の国際交流活動に関する調査（カルデナス，西頭，月野木，小林，2013）では、学生の海外留学・研修（66.7%）、留学生の受け入れ（38.1%）、教員の海外留学・研修（26.2%）、国際共同研究（16.7%）、定期セミナー・研究会（14.3%）、国際交流サークル（14.3%）、遠隔授業（4.3%）との報告があり、学生が海外へ渡航する活動が7割を占めていた。海外での研修を主とした国際交流の成果として、学生の国際的視野の広がり、異文化理解、英語への関心やコミュニケーション能力、単位取得、受験生の関心が高いことが報告されている（「10年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進」コンテンツ報告書，2016）。視野の広がり、異文化理解、語学能力などは文部科学省の報告書にあるグローバル人材の定義にも含まれており、海外研修で得る学びは大きいものがあることも事実である。本学の学生達が今後参加してみたいと考える国際活動では、外国の病院見学、語学留学、外国の看護系大学の訪問、国内でのボランティア活動、ホームステイなどが上位に上がっていた。学年が進行するにつれ、病院見学や看護大学訪問など医療や看護への関心が高まる傾向がみられた。2015年に1期生を対象にした調査（田村ら，2016）では、ホームステイやボランティアが最も多く、次いで病院見学や大学訪問があがっていた。このことから、学生達は学年が進行するにつれ、専門科目や実習での学びを通して医療や看護への関心が高まっていると思われる。大学への期待として看護学部での研修や海外留学などでの単位取得を望む意見があり、看護学部であることの特徴を生かした企画や活動へのニーズがあることが分かった。語学、期間、費用に関する考慮点に加え、研修で学習できる内容として外国の看護や医療を学べるものにする事で、参加しやすく、かつ、学内での学びと関連性を持たせることができる。海外研修プログラムに参加することは、学内での学習への負担になると捉えている学生もいるが、医療や看護について多様な視点で学ぶことができ看護の学習を深めることができるという認識につなげていくことができるのではないだろうか。看護学部での海外研修の企画については、研修内容だけではなく、MOU（Memorandum of Understanding）や組

織、FD、危機管理体制などを含めた全学的な検討となる（「10年後を見据えたグローバル人材開発・国際交流の推進」コンテンツ報告書，2016）。本学は既に海外提携大学もあり、全学的な国際交流推進委員会組織の実績があり、これらの学内資源を活用することができる。海外研修はすぐに実施できるものではないが、他大学の看護学部の実施状況や本学で蓄積されている経験を基に今後検討を続け企画を行いたい。

5. 本調査の課題

本調査は回収率が18.9%と低いため、必ずしも看護学部学生全体の国際交流活動に関する意識を説明できていない可能性がある。配布が4月のオリエンテーション期間であり、学生にとっては様々な手続きがある中での調査依頼となったことや、多忙な時期における回収期間や方法についても回収率に影響を及ぼした可能性がある。しかし、全ての学年において一定の回答が得られたことにより学年による比較ができ、看護学部における国際活動を検討する上での示唆が得られた。今後、学部に還元していきたいと考える。

v. 結論

今回の調査から、本学看護学部の学生は外国に関心を持ち、将来自分が看護職になる上で異文化経験や国際交流経験が役立つと感じ、看護や医療の視点において国際的な関心を持っていることが明らかになった。しかし、国際交流自体への関心はそれほど高くなく、大学で全学部の学生対象に実施されている海外研修プログラムへの参加を希望しない者が多いこともわかった。外国や国際交流に関心を持ちながらも海外研修を希望しない者もあり、その理由には語学に関する力量不足や不安、経済的要因、時間的余裕を感じることができないこと、学力不足があった。研修への参加を躊躇させているこれらの要因に対処し、海外の看護や医療について学習できる内容の研修であれば学生のニーズに対応しており、学部における将来の計画として海外研修を検討する意義がある。また、学内において日常的に異文化や外国の情報や人々に接する機会をつくることは、学部学生全てに対し行える活動であり、重要と考える。国際ランチタイム報告会やCultural Exchangeなどの活動を適宜評価しながら地道に継続していくことが重要である。また、教員が外国の研究者や研究組織と交流を持つことは、学生にその成果を還元でき、世界に目を向けるきっかけをつくることができる。そのために、学生・教員の双方を視野にいられた国際交流推進活動を行うことが委員会の役割と考え

る。

謝辞

本調査にあたり協力いただきました学生の皆さまに感謝申し上げます。

引用文献

カルデナス暁東, 西頭知子, 月野木ルミ, 小林貴子. (2013). 日本私立系大学の看護学教育における国際交流活動に関する実態調査, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 147-156.

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター. (2016). 10年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進 コンテンツ報告書.

黒木雅子. (2014). 異文化論への招待「違い」とどう向き合うか, 朱鷺書房.

香月毅史, 荒井淑子. (2009). 看護学生の短期海外研修における英語学習に関する意識調査, 上武大学看護学部紀要, 5 (1), 12-18.

神戸市. (2017). 月別各種統計表 外国人数,

< <http://www.city.kobe.lg.jp/information/data/statistics/toukei/datakobe/index.html> > .2017年11月1日検索

小島奈々恵, 内野梯司, 磯部典子, 高田 純, 二本松美里, 岡本百合, 吉原正治. (2015). 日本人大学生の国際交流に関する意識調査－「内向き志向」と国際交流意思の関係－, 総合保健科学 広島大学保健管理センター研究論文集, 31, 35-42.

田村康子, 丸山有希, 溝畑智子. (2016). 看護学部生の国際活動に関するニーズ調査. 神戸女子大学看護学部紀要, 第1巻, 27-35.

西頭知子, 月野木ルミ, カルデナス暁東, 小林道太郎, 小林貴子. (2014). 看護学教育における国際交流活動に関する学生の意識調査, 大阪医科大学看護学研究雑誌, 4, 96-104.

日本看護協会. (2012) ICN 看護師の倫理綱領 (2012年版), <https://www.nurse.or.jp/nursing/international/icn/document/ethics/pdf/icncodejapanese.pdf>, 2017年11月1日検索

日本看護協会. (2003) 看護師の倫理綱領, <https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/rinri.html>. 2017年11月1日検索

濱畑章子, 片岡由美子, 米田雅彦, 平井さよ子, 古田加代子, 原沢優子, 星野純子. (2004). 看護学生の国際交流に関する意識調査. 愛知県立看護大学紀要, 10, 27-32.

法務省. (2017) 平成28年末における在留外国人数について,

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00065.html. 2017年11月1日検索

文部科学省 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. (2011). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf

文部科学省 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. (2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム ～「学士課程におけるコアとなる看護実践能力」の習得を目指した学修目標～, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm, 2017年11月11日検索

文部科学省. (2017). 平成27年度文部科学白書, http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201601/detail/1376713.htm. 2017年11月6日検索

文部科学省. (2011). 国際交流政策懇談会最終報告書, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/009/toushin/1310853.htm. 2017年11月11日検索

文部科学省. 資料2 グローバル人材の育成について. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryu/_icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf. 2017年11月11日検索